

気仙沼の秀光和尚の節かたり説経

- 語りべ
- 片山秀光住職
- ジャズドラム
- バイソン片山
- 津軽三味線
- 富塚 孝
- キーボード
- 岸 淑香
- 他

ボードの節にのせて語る音楽法話

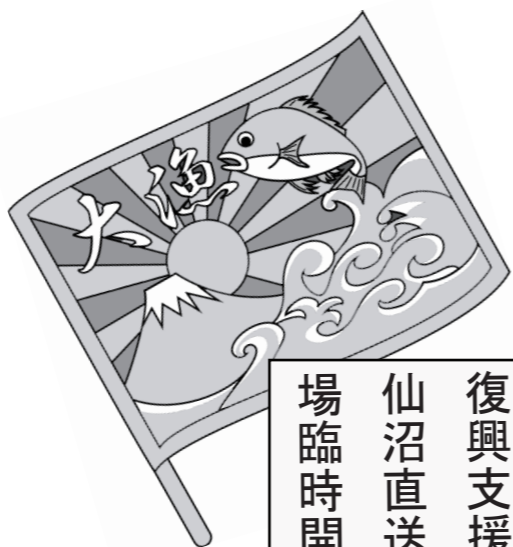
秋彼岸法要
九月十七日(敬老の日) 午前十一時から



津波で流された梵鐘をクレーンで吊って
除夜の鐘をつく片山秀光師



2011. 12. 31 初沢亜利撮影

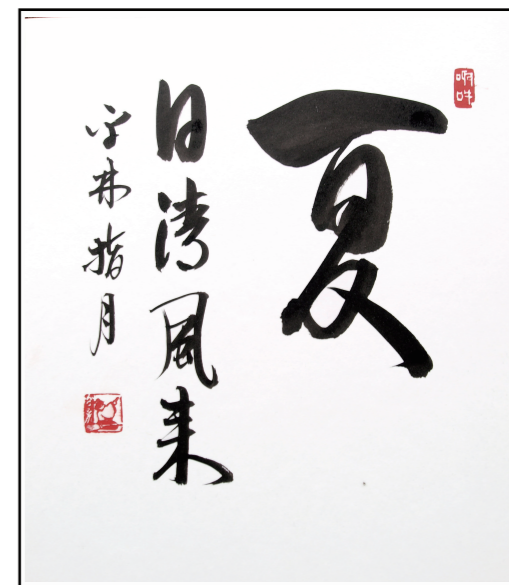


復興支援気
仙沼直送市
場臨時開設

気仙沼市地福寺片山秀光住職迎えての節語り説法です。海岸線から五百メートルほどしか離れていない地福寺は昨年の大震災で本堂の基礎と柱だけのこして、すべてを流されます。未だ再建なかばですが、片山秀光住職は「今、語らねば」と、請われるままに全国をかけ巡っています。当日は松岩寺の庭で、気仙沼の海産物も販売します。ご家族おそろいで、おでかけください。

不連続シリーズ「いっぶく紹介」 その7

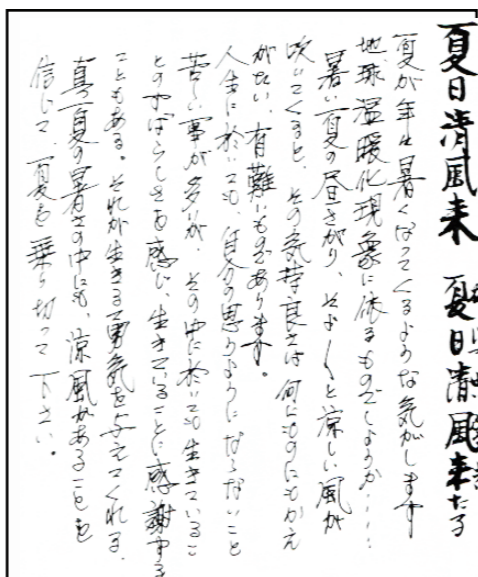
松岩寺は昭和20年の戦災でほとんどの建物と仏具を焼失してしまいました。現在あるものはかろうじて焼け残ったものか、先々代と先代がそろえたものです。その中から、興味深い墨跡の一幅を機会をみつけて、紹介していきます。



かじつせいふうきたる

今回、ご紹介するのは、新座市野火止平林寺先住職・指月庵野々村玄龍老師の色紙です。

平林寺は江戸時代に老中・松平信綱によって再興された妙心寺派の禅寺で、現在も多くの雲水(修行僧)が修行している。なんて、よそゆきに書くことはない。松岩寺の本寺であり、現住職も先住職も、平林寺で修行したのだから。野々村老師は残念ながらも昨年三月、大震災の直前に七十二歳で遷化(せんげー逝去)された。亡くなる三年前に臍臓ガンの手術を受け、医師からは余命半年とつげられたという。その闘病の様子を、後を継いだ松竹寛山老師は月刊誌にこう寄稿されている。
「病気をそのまま受け入れて自然の進行に任せるのも一つの選択であったし、他方積極的に病気を克服していかうというのも選択であったと



思う。ここで老師は後者を選択されたのである。本人の努力もあって三ヶ月ほどの療養生活の後、見事、本人云く「戦争だ!」と言われていた平林寺の職務に復帰。再び雲水の指導に心血をそがれることとなった」と。
今回紹介する「夏日清風来」の色紙はおそらく、手術後初めて迎えた夏に書かれた遺墨であろう。師みずから、色紙にこんな文章をそえられている。
「夏が年々暑くなってくるような気がします。地球温暖化現象に依るものでしょうか。暑い夏の昼さがり、そよそよと涼しい風がふいてくると、その気持ち良さは何ものにもかえがたい、有難いものであります。人生に於いても、自分の思うようにならない苦しい事が多いが、その中に於いても生きていくことのすばらしさを感じ、生きていることに感謝することもある。それが生きる勇気を与えてくれる。真夏の暑さの中にも、涼風があることを信じて、夏を乗り切ってください」
私は老師の病状を知らされていなかった。今になつて病との対峙した様子を読むと、この色紙のわずか五文字の奥底で吹く清風に愕然とする。(住職記)